昭和52年５月25日　第３種郵便物認可　令和２年９月10日発行（毎月１回10日発行）

円福

世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

9月

2020　No.480

世界法民連帯　円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のＳＡＢＡ運動で世界の平和に尽くしましょう。

ＳＡＢＡとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの１食１円のＳＡＢＡとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築（教育）や、井戸やトイレの設置（環境衛生向上）を支援する、国際ボランティア資金の運動です。１食１円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やＳＡＢＡ運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもいやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

キムさんがエコ村に入ってくれました。
写真は、ナチュラル小学校です。
カンボジアはコロナにより休校中です。
学校は塾になって、勉強したい子が集まっています。
キムさんが着いたら皆さん出てきてくれました。
左端は、サロン校長です。キムさんは真ん中にいます。

９月号の内容

にこにこ法話　お棚経　１ｐ
カンボジア支援　３ｐ
途上国開発協力こぼれ話　③アジア途上国開発協力への旅立ち　７ｐ
父の二人の弟のこと　尊い人間性を拝む　12ｐ
敬愛信　16ｐ

お棚経

恒例のお盆のお棚経が円成しました。

今年はコロナの感染第二波が拡大しているので、「おっしゃんお棚経をどうするの？」と心配して電話をくれた方がいました。「お盆でお帰りになったご先祖さまが待っておいでになるからマスクして行きますよー」と答えました。

今年のお盆は暑さが厳しくて大変でした。十四日は村の中を歩き、十五日は街中を手分けして車で回ります。おかげさまで永平寺を乞暇した息子が手伝ってくれて助かりました。

十五日にお伺いしたそのお宅は息子にお願いしたものの、きっとおばあちゃんが首を長くして待っているだろうと思い、ご挨拶だけでもと玄関先に伺いましたが、お見えになりません。ご家族に言づけて次のお宅へ移動する途中に、息子から電話がかかってきました。「おばあちゃんがおっしゃんに会いたいと言っているから来てください。」

奥におられたんだ。そうわかって、すぐに引き返しました。仏間に入ると息子がお経をよんでいました。椅子に腰かけたおばあちゃんの隣に座ると、「おっしゃんよかったなあ、おっしゃんよかったなあ、息子さんがお経をよんでくれて、これで圓福寺も安泰だ。おっしゃんよかった、よかった。涙が出たよ」そう言って、私の手をしっかり握ってくれました。私は一緒にお経を

ニコニコ法話

よんで回向が終わると、おばあちゃんありがとう、お話しできてうれしいよ、いくつになったの？九十一だよ。九十一、若いねえ。こういうとおばあちゃんは、娘さんのような笑顔になって私の肩をポンと叩いて、嫌だねえ若いなんて、とにこにこして言います。近くに百一歳のおばあちゃんが元気だよ。十歳も若いでしょう。そうお話をしました。娘さんご夫婦もお孫さんもみんな笑っていました。

お檀家の皆さんは、お盆にはおっしゃんが来てくれると楽しみに待っていてくれます。そして、お話すると嬉しそうです。私もお話するのが嬉しいです。コロナがあってもお棚経ができて、本当に良かったと思いました。

昔、父が出版だよりに「福田を耕す」と書いたことがありました。田に水が行き届いているか、雑草がはびこっていないかと、よく見回りをして育てないと良い稲はできません。同じように檀家の皆さまのお宅の一軒一軒に心を配り、お棚経をし、たくさんお話して、心でつながることができれば、それがまさに福田を耕すことになるというお話でした。その通りだと思います。

おかげさまで、今年も無事にお盆の修行を円成できました。

カンボジア支援

エコ村だより

キムさんがエコ村に入ってくれました。
カンボジアでは県をまたいで移動ができるかどうか、8／3に聞きました。移動ができたら、エコ村に入って、サロン校長と連絡を取り、井戸を掘ってくれませんかとお願いしました。

8／4のメールです。

おはようございます!!
昨日はとても忙しかったのでメールをしなかったから申し訳ないです。
コロナウイルスは今日も15人うつりました!とてもこわいウイルスですね。
県をまたいて移動することは出来ます。
エコ村に井戸を掘りますね。
きっと大勢の人が助けられます　今年の乾季は長かったので水の問題がありました、でも　最近雨がよく降ってきました　助かりました。
井戸のことは大丈夫です　あとでサロン校長先生に連絡を取ります
色々を相談して決めます　井戸の見積もりは　エコ村に行ってから井戸を掘る人を探して値段を交渉します　決まったら　また先生にメールをします　私は7日まで忙しいので8日を休みの日にして行きたいと思います
（キムさんは、ドローンで田んぼに農薬を撒く仕事をしています。大きなドローンを持っています。すごいですね。とっても忙しいと言っていました。）

8／12のメールです。

おはようございます!!
今　カンボジアは雨季です　そんなに暑くないです　雨が多くなってきます
エコ村にまだ行っていないです　サロン先

生と連絡を取りました　15日に打合せをして一緒に村を回ります　井戸を掘る人ともその日に会えます
今　ドローンの仕事はとても忙しいです
エコ村に行っていっぱい写真を取って送ります!!
もう少し待ってください
ではお元気で。

8／17のメールです。

先生　15日にエコ村に行ってきました、たくさんの家を回りました　そしてＭｓｃｈｅｒｎ ｒａｔａｎａ（ラタナさん），Ｍｓ ｙｕｔ ｃｈｅｎｌａ（チェンラさん），Ｍｓ ｓｅａｎｇｌｙの家に行きました。
Ｓｅａｎｇｌｙのダンナさんは去年の末になくなりました、Ｓｅａｎｇｌｙさんは今その家にいません、家を売って違う村に出ました
あと　チェンラさんは自分で井戸を掘りました十分使えます
ラタナさん家は大変です　水がないので遠い所から水を積んで来て使っています、自分の手で井戸を掘りましたけど雨季だけ水が出て乾季は出ないです
私が行ったときたくさんの人が来て　みんなの話を聞いてやっぱりみんな水の問題があります。水がないので野菜も作れないですだからみんな違う村に出て仕事を探しますでも人にやとってもらっても安いから食べても大変です。
あと前作った井戸は一部の井戸は水が出ないです。一部は壊れて使えないです。私の意見は先生が作った井戸のリストをもらって一つ一つチェックして、どれか使っているどれか壊れている（かを調べます）。その方が分かりやすいです。そうしないと、いくら井戸を掘っても足りないです。そして掘ってあげた家に約束をしてもらいます
たくさんの写真を取りましたけど　メールで送ります
写真は（容量が）大きいと思います　あと

メッセンジャーでも送ります
ではお元気で。

メッセンジャーで送られた写真を紹介しましょう。

友の会が支援しているナチュラル小学校です。左端がサロン校長、キムさんが中央後ろにいます。コロナで学校は休みが続いています。学校は塾になって、勉強したい子が来ています。キムさんが訪問すると、みんな出てきました。

学校のマンゴーです。第一回ツアーのときの富沢孝さまの寄贈です。大きくなりましたね。

ラタナさんの手掘りの井戸です。深さ10mです。底に水が見えます。モーターで水をあげるのでしょう。次の写真はコンクリートのリングを

宮田さんご家族が寄贈された井戸です。井戸をこいでいるのはキムさんです。

使った浅井戸です。これらの井戸は、雨季には水位が上がって水を汲めますが、乾季は水位が下がって水は無くなります。

この家（左の写真）は、Ｍｓ　ｎｈｏｒｋｈｅｎｇ　の家です。手で掘った井戸があります（左下）。でも乾季になると水がないです。雨季なら井戸に水がいっぱいです。それで乾季になると遠いところから水を運んできます。この人は井戸が欲しい。約束をしてくれます。

井戸がもらえたら大事に使います。たくさんの野菜を作ります。近くの家でも一緒に使います。

キムさんの話では、エコ村付近は地下水位が低くて地下40ｍです。地表との間に、岩盤があります。だから深井戸は掘るのにお金がかかるそうです。でも、何人かの井戸掘りの人と交渉して、安く掘りたいと言っていました。

左の写真で左はサロン校長、真ん中の人は井戸掘りの職人だそうです。

キムさんがエコ村に入ってくれて、エコ村支援が動き始めました。井戸のご寄付をされたみなさんは、もうしばらくお時間をください。

途上国開発協力こぼれ話
③アジア途上国開発協力への旅立ち

円福友の会顧問　吉田恒昭

古希を過ぎて人生の軌跡を振り返ると、その行路には幾つかの鮮明な変曲点が浮かび上がってくるようです。私の場合には明らかに土木工学科3年への進学時の１９６８年４月です。この時に、アジア途上国を是が非でも見てみたいと、休学を決意してインドシナ諸国放浪の旅へ出発します。この青春の旅が私の生涯の仕事になるアジア途上国開発協力の起点になりました。私は3月末に仙台から東京の実家に戻り、旅の資金を稼ぐべくアルバイトを始めます。７月末までの４ヶ月間に調達できた資金は、教養部時代にコツコツ貯め込んだ貯金、バイト給金、加えて叔父からの出世払いの借金などで、合計約50万円近くになりました。当時の国立大学の年間授業料が３万６千円で、大卒の初任給が月額３万円ぐらいの時代ですから相当な金額です。

旅の目的地をメコン川が流れるインドシナ諸国と定め、これらの諸国を回遊できる１年間有効の航空券代金が何と約20万円でしたので軍資金の４割が消えてしまいました。当時（１９６８年）は1米ドルが３６０円で、今のような格安航空券などありませんでした。よって旅の装備は安宿とヒッチハイクを覚悟して、まるで登山をするような出立でした。他人から見れば無謀に近い冒険としか見えないのでしょうが、本人にとっては「未知との遭遇で人生観や世界観を再構築する」

①庄司真語君（右）と筆者
１９６６年東北大学片平構内

などと意気揚々とした旅立ちだったのです。

この二度目の休学とアジア放浪の決断は、闘病休学時代に芽生えた自問であった戦後世代の日本人としての生き方を求めての確信的な行動でしたから、自分的には誠に整合性のある決断でした。しかし、まわりの人達にはほとんど理解されませんでした。特に両親は私が同期生よりも二年も遅れることをひどく心配していたようです。また土木科の先生方はこぞって、「学生の分際で休学して内戦中のインドシナ放浪などもっての外、誠にけしからん」と諌めるばかりで、私の心意気（志）などには聞く耳をもってくれませんでした。このように孤立感を深めて悩んでいた折に、私の決意に熱心に耳を傾けて、「吉田君の青年としての志は誠に壮快、必ず無事の帰国を約束せよ」と言って励まし、ビザ取得に必要な所属長としてビザ申請書類に署名をして下さったのが電気工学科教授の城戸健一先生（後に日本音響学会会長瑞宝中綬章）でした。城戸先生とお近づきになれたのは、私が卒業した駒場高校の一年後輩で東北大の電気工学科に入学してきた庄司真語君のお陰でした（写真①）。庄司君の指導教授が城戸先生で、庄司君の絶妙な計らいで城戸先生宅での夕食に私も招かれたのがご縁の始まりでした。庄司君は２０１３年11月に円福友の会が実施した第１回カンボジア国際支援ツアーに参加してくれて、帰国してから「圓福」誌上に痛快なツアー日誌を多くの自筆挿絵とともに寄稿してくれた円福友の会の有力会員の一人です。

私は学生時代には人生訓として「和して同ぜず」をいつも意識して過ごしていたと思います。同世代の多くの仲間とはいささか外れた道を歩いているとの自覚があり、それ故に、時には孤独感に苛まれて自尊心が揺らぐことも度々ありました。このような折に、城戸先生から頂いた「志こそあっぱれ、頑張れ！」の励ましが大きな支えとなりました。私が50歳を過ぎて東京大学に奉職した折に、座右としたのは格言は「教えるとは希望を共に語ること、学ぶとは真を胸に刻むこと」でした。

教授となって、学生の志や希望を育み共に語り、それを支えることを第一義としたのは城戸先生から頂いた貴重な御恩があったからこそでした。教え子の志（目標）を育み、共に希望を語ることは教え子達の自立を支援すると言う教育の真髄に他なりません。人生には家族、友人、先生などから無償の力によって支えられて来たことに心底から気づくのも古希を過ぎたあたりからかも知れません。誠に「年老いて　ふり向き返れば、お世話になった人ばかり」です。

私のインドシナ諸国放浪の旅はアジア途上諸国の現場を五感で感じて世界観や人生観を再確認することを旨とし、「戦後世代の日本人はアジアで一体何者なのか」を考えたかったからに他なりません。１９６８年８月８日に羽田を発ち、香港とサイゴンを経由してメコン川を上空から眺めつつ最初に降り立ったの異国の地がカンボジアの首都プノンペンでした。従って、カンボジアは私にとって格別の思い入れがある国なのです。それから半世紀を経て、円福友の会のカンボジア国際支援事業が私の人生の最終章の活動と重なるのは学生時代から続く円福寺との良きご縁の賜物と「有難いと思う心が今日の幸せ」との思いを強くするこの頃です。

プノンペンの安宿に泊まり街中を歩くと、私がアジア関連の書籍から蓄えてきた観念論は瞬時に蒸発していくのを感じました。単身で街の雑踏に身を置くと、知識は何の意味も持たず、自己防衛本能として働く動物的五感のみが極度に鋭敏となるようです。目に映るのは見覚えのない異空間、耳に聞こえる音は異国の旋律と雑踏音、匂いも不可解、そして舌は日本にはない香辛料に驚きます。生暖かい空気の中で身体が浮遊し、意識さえも朧げになる強烈な熱帯アジア体験でした。「なるほど、青春の旅の凄み、これにあり」と旅の第一歩で妙に得心したのを覚えています。日本に生まれ育って身に付けてきた衣（世界）を一度蒸散させて脱ぎ捨て、異なった世界での体験を通して人生観と世界観を再吟味するこ

とこそが青春の旅の醍醐味なのだと思いました。この経験から数十年後に国際開発協力学を教える大学教員となった時に、教え子たちに向かって「自己責任の一人旅で異国を体験せよ」と鼓舞したのは、私のこの五感を通しての貴重な体験があったからでした。

カンボジアでは路線バスを乗り継ぎながらアンコールワットを含む西部方面を周遊しました。写真②は今から半世紀前の「誰もいないアンコールワットとバイヨン」に佇む筆者で、隔世の感です。その後、プノンペンに戻り、バンコクへ飛びます。鉄道とヒッチハイクでお寺に泊まりながらタイの最北端の黄金の三角地帯に辿り着いて、そこから小舟でメコン川を渡り、内戦で難民が流動するラオスの小さな町ホエサイに入ります。投宿した木賃宿に警官が訪ねてきて不法入国の疑いで署まで連行されて厳しい取り調べを受けました。幸いにも期限切れではありましたが、東京で取得したラオスのビザがパスポートに押されていたので事なきを得ました。宿屋では泥棒に金品を奪われ

②アンコールワット参道（左）とバイヨン（右）、1968年8月

③ラオス北西部・ホエサイ 土と小石の滑走路（左）と空港待合室の竹壁に貼られた首相の写真と滑走路に近づくと危険と5か国語で表示されたポスター（右）、この飛行場は軍用物資と難民を輸送。1968年9月

そうになり、その泥棒を捕まえたりもしました。このホエサイの飛行場は写真③で見る如く滑走路が舗装もされておらずメコン川に向かって下り坂になっていました。この写真は撮影禁止区域で警備兵が銃口を私に向けて突撃してくる直前にシャッターを切った貴重な写真です。今考えると何とも危険この上ない旅でもありましたが、青春の一途な情熱は危険に対する感覚をいとも簡単に麻痺させるようです。しかし、この放浪体験が途上国での仕事に不可欠な「慌てず、焦らず、諦めず、何事にも驚かず、雑草の如き対応能力」を育み、その後の途上国開発現場での仕事で大いに役立つ資質を鍛えてくれたのです。

　このような冒険的放浪を経て再び香港経由で10月11日に無事帰国し、放浪は2ヶ月余でしたが、感覚的には数年間を経たように感じたことを覚えています。帰国後に暫く微熱が続いたのは旅の厳しさを物語っていたのだと思います。この青春の旅こそがアジア途上国開発協力の仕事を私の天職と定めた契機となったのです。次回からはこの放浪道中記の一部も紹介しながら、私のアジア途上国での「こぼれ話」に入りたいと思います。いの一層の奮起を約束し合ったことでした。

　今になって光世住職と過ごした学生時代を振り返ると二人の基本的な気質には似たところがあることが見えてきます。それは「我が信念で我が道を行く」と、それ故に二人とも将来の道の選択で迷った時は敢えて苦難に挑む道を選ぶという気質でしょうか。例えば、光世君が教員を辞して、永平寺の山門をくぐり難行苦行の期間を過ごしていた時期を同じくして、私も会社を辞職し退路を断って、家内と2歳の長女を背負ってロンドン大学での極貧留学を選択しています。

　光世住職は永平寺の修行明けに私を励ましに修行僧姿でロンドンに来てくれました。この時の抱腹絶倒の話は別の機会にします。次回からは記事のタイトルに相応しいアジア途上国でのこぼれ話に入って行きたいと思います。

父の二人の弟のこと

尊い人間性を拝む

藤本幸邦

旧制松本高校記念誌より

悌道（16文乙）、と易従（17文乙）の二人の弟が今生きていたならばと、折に触れて思うのである。

二人とも旧制松本高等学校において保証人を玉川先生に仰ぎ、格別のお世話になったままご恩返しもせず、易従は肺を病み、五年間の闘病の果てに夭折し、悌道は美学を修め文部省に奉職したが、終戦直前ラバウルで戦死した。弟の易従は、真面目によく勉強したが、兄の悌道は学校をサボり、玉突きや紅灯の巷に遊び、退学処分を受ける始末となった。その時、玉川先生は一人矢面に立って、「私にまかせてほしい」と手に負えぬ悪童であった悌道をかばって下さったのである。そして清水町の先生のお住居の近くに家を借り母が松本に出張して二人の面倒を見るということで、ようやくにして学校当局のゆるしを得たのである。思えばお粗末な話である。

悌道はついに一年遅れて松高を了え、易従は寮に戻ったのであるが、肺を病む同室の友達を看病しているうちに自分もこれに侵された。

―五月になってセルの着物を着た肌ざわりが気持ちよいままに玉川先生の家へ遊びに行ったら、奥さんがまた筍めしを焚いたら呼んであげるよといわれ、その日を今日か明日かと心待ち

千曲川のほとりでくつろぐ兄弟。左から悌道、幸邦、易従

していたが遂に沙汰やみとなった。奥さんはもの忘れをする性質らしい。――と日記に恨めしそうに書いてある。先生のお宅に親しく出入りをした様子が偲ばれる。

五・一五事件、二・二六事件、やがて大東亜戦争へ突入していく歴史の宿命が、否応なしに迫ってきた国家非常時の最中、日本を憂うる師の側近にあった私は家庭をかえりみなかったのである。もちろん悌道のごとき学生は、弟といえどもゆるし難く、一度授業料を納めず使い果たし、困ったあげく横須賀の渡辺家塾に私を頼ってきたが、学校をやめてしまえと厳しく叱りつけて追い帰した私であった。そのような愚弟達を、玉川先生は吾が子のごとくかばい、いつくしみ、あたたかく導いて下さったのである。

悌道が雑誌アテネにフランス語の翻訳文を寄せたりして、演劇の研究にすすみ、学業をおえると文部省につとめ、文化映画の認定官となったが、応召を前に母校松本高等学校で映画会を開いた砌、私たち一家はこれに参じ、親しく玉川先生にお礼を申し上げたのであった。そのとき私ははじめて玉川先生に拝眉を得た。悌道としては玉川先生のご恩に謝するせめてもの意を表した企画であった。

厳しかった父も老いて、悌道が贈った杖をついて会場に出向いたが、玉川先生が満場の学生観衆にほんとうに嬉しそうにご挨拶下さったときに、父はおろおろ泣くばかりであった。私はそのとき、放蕩の弟を冷酷に鞭打った自分と、学生の将来を信じて、どこまでもこれを許し、あたたかく見守って下さった玉川先生とを比較し、そこに教育者としての深い慈愛心、いや、そこに玉川先生そのものである生得の尊い人間性を拝んだのである。

戦死した悌道の墓は夭折した易従の墓と並んでいる。墓前に焼香を賜ったあと、玉川先生は「私に話させて下さい」といって、二人の墓を抱く

ようにして、声をつまらせ思い出を語られたあと、天を仰いで咽ばれた。桜東雄を意中の人とし、お嬢さんの名を「佐久良」と命名されたと弟に聞いたことを憶えているが、日本農民史研鑽の学績とは別に、先生の内奥に燃える日本民族の血と、先生の深い人間愛が、先生をして日本農民史にむかわしめたのではなかろうか。敗戦の結果、日本民族としての価値は崩壊した。玉川先生はこれに妥協できず、信州と訣別されるに当たり、先生秘蔵の文庫『二十四史』五百冊を、先生の意に従い、弟たちの母校である県立屋代高等学校の図書館におさめさせていただいた。

悌道の遺した『世界文学全集』も同じく母校に贈ったが、それは玉川先生の奥さんが、悌道に下さったものであることをこのたび承り、先生ご夫妻の慈愛に応うべき弟たちの亡きを歎ずるのであるが、同窓名士方のはからいで、叙勲追贈のことしかないとの報を拝し、先生の御霊の冥さられんことを念ずるものである。（旧制松本高校記念誌より）

松本深志高校に赴任して同窓会に招かれると、「松本深志高校の概況」と題して、校長通信『鯉』や学校経営方針などをプリントして綴じて持参した。題字は筆で書いた。同窓会東京支部は二百名以上の同窓生で賑わう。概況報告を兼ねたあいさつが終わって懇親会になると、ある方が混雑をかき分けて寄ってきてくれた。

あなたは藤本校長ですか。そうです。この題字はお寺のご住職と思われますが、ご住職ですか。そうです。すると、その方は感極まったように私は玉川と言います。篠ノ井の円福寺さまですね。お父上の晋山式に父の代わりに参列しました。式の中でお坊さんが本堂の中をぐるぐる回って、そのあと須弥壇の上に立ったお父上に「いかなるかこれ　須弥壇上の景色？」と問うとお父上が大声で「千曲川に聞けーっ！！」と答えたのを憶えています。

その方は、玉川先生の息子さんでした。驚きました。本当に驚きました。深志に行かせてい

ただいたおかげで、こんなご縁の方にお会いできるとは。旧制松本中学と、二人の叔父と、叔父の面倒を見た祖母が、松本のこの地にいたことが親しく感じられました。

松本深志高校の校長の時代に、父の誕生会を松本で開いた。ドクトルマンボウ青春期に登場する、北杜夫の物理の答案に60点を付けた松崎一先生は、藤本易従の屋代中学の同級生で、お元気で松高記念館を案内された。玉川先生の写真とともに思誠寮の入寮者の名札の写真があった。その中を探すとなんと藤本易従の名前があるではないか。嬉しかった。叔父がここで過ごした証拠だった。

春寂寥（せきりょう）の洛陽に
昔を偲ぶ唐人（からびと）の
傷める心今日は我
小さき胸に懐（いだ）きつつ
木（こ）の花陰にさすらえば
あはれ悲し逝く春の
一片毎（ひとひら）に落（ち）る涙

（松本高校思誠寮寮歌「春寂寥」
吉田実作詞　浜徳太郎作曲）

『春寂寥』はユーチューブで聴くことができます。

（註）　玉川鵬心様、中藤照美様、金井延夫様は旧制松本中学の同期で、深志在任中の五年間にひとかたならぬご厚情を賜りました。ご恩を忘れません。

敬愛信

新型コロナウイルス

緊急事態宣言によりいったん収まった感染拡大が再び始まり、今は第二波の大きな山の中にあります。皆さまは、感染しないように三密を避け、マスクの着用や手指の消毒など様々な対策を取られていることと思います。

この病気は、感染の症状がないのに人にうつすのが厄介です。自覚がなくても感染しているかもしれない、そして人にうつしてしまうかもしれない、うつったら死んでしまうかもしれない。ここに恐怖が生じます。

奈良県の大学や島根県の高校の合宿所でクラスターが発生して、学校に非難の電話やメールが殺到し、ホームページの写真が流出し、ひどい差別になっていることが報道されています。思いやりの心をもって冷静に対応してほしいと願うばかりです。

円福寺愛育園は子どもの集団生活の場ですから、ウイルスが入ればクラスターになる可能性があります。今から、最悪の事態に備えて最善の準備をしておかなければなりません。第一波の時の危機感を胸にして。

チャリティ講演会

円福友の会東京支局が毎年父の誕生日（8／29）に開催していた、チャリティ講演会が今年は開催できないので、講演のDVDを作成して、それを皆さまに視聴していただくことになりました。せっかくの機会ですので、今の愛育園のおまいりを紹介しようとビデオに撮ってもらいました。おまいりはその時々の子どもの心を表します。大きな声でおまいりができる子は、すべての生活に一生懸命取り組んでいます。

今の愛育園のおまいりはすごいです。圓福寺での参禅の後で、愛育園にきて子どもたちと一緒におまいりをする、長野県倫理法人会国際ボランティア委員会の皆さまが、口をそろえて「感動した」と言ってくださいます。

「涙が出た」と言われる方もいます。映像から一生懸命な子どもたちの姿が伝われば嬉しいです。

平成28年の児童福祉法改正を受けた「新しい社会的養育推進計画」は、「子どもの最善の利益」を家庭で育てられることとして、愛育園のような集団の力を利用して、規則正しい生活をする子育ては認めていません。家庭ではおまいりはありません。規則正しい生活はありません。子どもが集団で外で遊ぶことや集団の行事もありません。皆さん、「子どもの最善の利益」とは何でしょうか。私は愛育園の子育ての実践事実を通して社会に問いたいと思っています。

感謝のお知らせ

○令和二年八月分
（七月二十八日～八月二十三日）

●SABA資金
（青森県）様
（千葉県）様
（神奈川県）様
（長野県）様
（岐阜県）様
（大阪府）様
（徳島県）様
●エコ村支援
（東京都）様
（埼玉県）様
●おもいやりの会
（宮城県）様
（千葉県）様
（長野県）様
●災害義損金
（宮城県）様
（千葉県）様
（長野県）様
（岐阜県）様

ご協力ありがとうございました。

お知らせ

熊本県南豪雨災害義捐金として、熊本県に20万円を送りました。

九月の法母会

二十七日（日）　午前八時半より

十月の参禅会

四日（日）　午前五時半より

（開始時刻が遅くなりますご注意ください。）

『円福』　令和2年9月号
第四八十号
定価一五〇円

発行日　令和2年9月10日
発行人　藤本光世
発行所　円福友の会
〒388-8005 長野市篠ノ井横田円福寺
TEL（〇二六）二九二－〇三八一
FAX（〇二六）二九三－九六二九
振替口座
〇〇五二〇－七－一六二五六

円福友の会・ＳＡＢＡスクール

愛の日の丸　ＳＡＢＡ運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア　エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援（教育里親）

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会（愛育園児童自立支援）

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の **協力金は**　郵便振替 **00520－7－16256**
加入者　**円福友の会**　あてに御送金下さい

〒388-8005　長野市篠ノ井横田 円福寺内
TEL　０２６－２９２－０３８１
FAX　０２６－２９３－９６２９
http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/
enpuku2@janis.or.jp